

異文化の拒絶と受容

— 恐怖管理理論の観点から —

向井 有理子

要 旨

国際化、グローバル化が推進されるとともに、それに逆行して自文化中心の動きが支持を集めるという現象が起きている。恐怖管理理論は、文化的世界観と自尊心の2次元によって、人は潜在的に常に持っている死の恐怖から自己を守っているという理論である。死の運命強調は自文化中心で攻撃的な行動を動機づける。都市部においては、経済活動の国際化に伴う文化の均一化や日常的な異文化接触により、自文化の普遍性が著しく損なわれ、競争の激化によって生まれる敗者の増加による自尊心への影響が懸念される。このような文化的世界観の安定性が揺らぎ、自尊心が低下するような状況では、自文化中心の行動がより激しいものとなるであろう。このような過激化を抑制し、より異文化受容的な反応を導く要因の決定には、文化的世界観に規定される行動規範へ働きかけることや文化の特徴を考慮した研究が必要である。

キーワード：恐怖管理理論、グローバリゼーション、文化的世界観、自尊心、異文化

国際化と自文化中心の動き

近年、国際化、グローバリゼーションの動きが急速に進展してきている。こうした動きは、市場経済において急速に広まり、先行して行われているが、その変動は市場経済にとどまらず、それ以外の分野においても大きな変化を示し始めている。社会学者たちは、グローバリゼーションを、「地球上のある地点で生じた行為や決定や出来事が、そこから地理的には遠くはなれた地点の行為や決定や出来事に対して、直接的な影響や作用を及ぼすようになり、しかもそうした影響や作用が短時間のうちに及ぶようになるプロセス」と定義している。この経済活動に限定しない定義に反映されているように、経済活動

に先導されながらも、ありとあらゆる分野において、国際化、グローバル化の波が押し寄せている。

これまでの世界においても、地球上の離れた地点間の関わりが全くなかったわけではない。例えば、人間ははるか昔から貿易活動を行い、離れた地域との物資の交流を行っている。しかし、こういった活動がそれぞれの地域経済とそれらを結ぶものとの2次元で行われていたのに対し、現在の経済活動はグローバル化されたことで世界経済という大きな1つの活動の中に取り込まれているのである。グローバル化によって、多国籍企業を中心に、世界展開する資本がより安いコストと大きな市場を求め、ありとあらゆる地域に進出している。そこでは、投資に

対する最大の成果が要求され、市場至上主義の下、より大きな共通市場での自由競争、市場の自浄作用が重んじられる。ビジネスの世界においては、舞台はもはや地域ではなく地球であり、ローカルな部分を排除し、世界基準に基づいた行動が求められているのである。例えば、日本においても、年功序列、終身雇用といった雇用体系は崩壊しつつあり、競争を重んじ、実力主義を掲げる企業が増えている。こうした変化は、人々の人生設計や価値観に影響を与えずにはおれない。また、このような変化は次世代への教育方針にも大きな影響を与えている。文部科学省による平成 14 年度から実施された新しい学習指導要領では、外国語が中学校、高等学校において必修になり、小学校においても「総合的な学習の時間」などで英会話を実施するよう記載され、国際化時代に対応した教育を目指す姿勢が示されている。

経済の中心である都市では、国際化、グローバル化の影響が顕著である。都市の入り口である空港や都市機能の中心部の外観は、どの都市においてもローカル性がとぼしい。無国籍な外観こそ近代的な都市の象徴なのである。ビジネスのために短期滞在するだけの人は、どのような国でもその気になればローカルな文化を一切知ることなく過ごすことが可能であろう。都市には多国籍企業や金融機関の本社が集中し、さらに、この集中は、これらの活動をサポートする産業の都市への集中を引き起こす。企業の競争激化が、より優秀なエリート労働力の国際的な移動を促進し、それに伴ってより底辺の労働力移動も活発になっている。都市では、外国人に遭遇することはもはやあたりまえの出来事になった。彼らは、様々な異文化を都市に持ち込むだけでなく、新たな都市文化の形成を推進する。

グローバル化、国際化が進行している中、こうした動きに反対する活動も起こっている。2002 年 7 月にジェノバで行われたサミット（主要国首脳会議）の前には、世界各国から反グローバル派が集まり、集会やデモを行った。近年、主要な国際会議の前には必ず、こうした活動が起こり、中には警官隊と衝突するような過激な活動を行うグループもある。また、民族原理主

義や宗教原理主義の過激派によるテロリズムは、国際社会共通の主要な政治的課題の 1 つである。2001 年の 9 月 11 日にアメリカを襲った同時多発テロは、まさにアメリカ主導のグローバル化の中で苦境に立たされた者によって行われた、宗教原理主義に基づく過激な行動であったといえる。さらにテロ直後のアメリカでは、神の下での国民の団結と報復攻撃を叫んだブッシュ大統領に支持が集まり、救援活動を行った軍や警察、消防の人々は英雄としてもはやされ、愛国心が一気に高まった。2002 年 1 月からユーロ紙幣・硬貨の流通を開始した EU では、フランス大統領選で決選投票まで進出したルペン党首率いる国民戦線だけでなく、各国において極右政党の躍進が目立ち、話題を集めた。こうした極右政党の多くが、治安の悪化や失業を移民・難民問題と結びつけ、強硬な移民排斥を訴えて票を獲得している。

本研究では、恐怖管理理論の観点から、このような自文化中心的、異文化拒絶的な活動について説明を行うだけでなく、より過激な行動を抑制するための重要な要因について示唆することを目的とする。恐怖管理理論（Greenberg, Solomon, & Pyszczynski, 1997; Solomon, Greenberg, & Pyszczynski, 1991a）は、人が存在する限り逃れられない恐怖である死の恐怖から、自己の文化を基にした 2 つの要素（文化的世界観と自尊心）によって自己防衛していることを示した理論である。本研究では、理論について説明し、自文化中心的、異文化拒絶的態度や行動についての実験的研究をあげた後、国際化の中で伝統文化が揺らいでいる現状を踏まえ、文化による防衛機能の低下、異文化受容的な態度や行動の規定要因について提案したい。

恐怖管理理論

（Terror Management Theory : TMT）

人は他の動物と同様に、強い生物学的欲求である、生存し続けたいという自己保存の本能を持っている。しかし、人が他の動物と決定的に異なっている点は、人がはるかに複雑な認知機能を有していることである。この認知機能を持

つことによって、人は過去を振り返り、未来に思いをはせ、自己を客観視することが可能なのである。人は、存在の意味を考え、生と死の謎を探求するがゆえに、自身の生や宇宙への畏怖、自己の存在の弱さや避けられない死への恐怖を感じるのである。他のどのような生物も自己の弱さや死を客観的に考えることはない。人は、常にこの自己の存在の危うさや死への恐怖を持ちながらも、健全な日常生活のためにこの恐怖を意識下に抑圧しているのである。恐怖管理理論は、人が普段、死の恐怖をどのように意識下へ抑え、その状態を保っているのかについて、文化的世界観 (Cultural Worldview) と自尊心 (Self-esteem) という2つの次元によって、人は死の恐怖から身を守っている (Greenberg, Solomon & Pyszczynski, 1997) とする理論である。

死の恐怖の抑圧について、Becker (1973) は「代理の力に頼って生きる」ことほど自然なことではないといっている。彼は、幼少期にあっては両親という個人の力、成長が進むと、事物や文化の指示力に埋没し、その中で人生計画が精密に立てられるとき、その人は死に対する恐れを抱く必要がないと言っている。つまり、文化の中で象徴的に作り上げられ、維持され続けているような共有概念に基づいて生きることによって、人は死の恐怖を抑圧し、比較的平静を保つことが可能となるのである。この共有される概念が文化的世界観である。文化的世界観は、社会の中で教育を受け、様々な儀式や様々な対人関係の中で自然と確認されることから獲得され、維持される。文化的世界観の役割は、混沌とした世界を意味と秩序の支配する世界へと変え、生と死の意味、死後の世界、宇宙や誕生の謎について答えることで、直接的に死の恐怖を緩和することである。つまり、極楽や天国、輪廻転生といった死後の世界を呈示することで、人は不死であると教えるのである。また、はるか昔からおそらく遠い未来まで脈々と受け継がれる文化の一員として生きることにより、自分という「個」を越えた永続性を獲得することができる。たとえば、自分が死んだとしても、社会の良き一員としてなしたことが子どもたちや他の者たちを通じ、脈々と受け継がれると考える

ことは、人に象徴的な不死の感覚を与えてくれる。

さらに、文化的世界観は、何が正しく、何が誤りであるのかという、良く生きるための基準も与えてくれる。自己がこの基準に従って生きていると感じる信念が自尊心である。一般的に、心理学において、自尊心は、「自分の価値、能力、適正などの自己評価が肯定的であること」と定義されるが、恐怖管理理論においては、「社会的に価値ある自己である感覚である」と、より狭義に定義される。所属している文化の規範に従い、その中で評価されるような態度や行為を示すことや、模範的な行動を取るべきだと考えたり、自分はそのような行動をとっているという自己評価をおこなったりすることによって、人は自尊心を維持している。この自尊心を維持し、保護しようという動機は非常に強く、ときには社会の英雄として死ぬことや死に至るような厳しい美徳の追及さえも導く力がある。かつての英雄たちが今もなお、語りつがれているように、こうした最高の価値を体現することによって、人は確かに、死を超えた永遠の存在となることが可能である。

文化的世界観と自尊心によって、人は自己を価値ある世界の価値ある個人であると認識し、個人の力を超えた支配力に頼ることで、死の恐怖を抑圧し、身を守っているのである。死の恐怖が身近であればあるほど、文化的世界観や自尊心は確かなものでなければならず、これらを脅かすものから保護されなければならない。また、逆に、文化的世界観や自尊心が不安定である場合には、死の恐怖に対する緩衝装置としての十分な機能が果たされず、死の不安を感じやすい状態に陥るのである。

自文化保護と異文化拒絶—実験的研究

恐怖管理理論の主な実験的研究では、理論から導かれる2つの仮説、不安緩衝仮説と死の運命強調仮説の検証が行われている。

不安緩衝仮説とは、文化的世界観や自尊心が死の不安に対する防御の機能を果たすなら、文化的世界観や自尊心を増強すると、死に関連す

る不安が軽減されるとするものである。この仮説は、特に自尊心の次元において数多くの研究がなされており、自尊心と死の不安や不安に関係した身体的、心理的異常との負の相関関係が確かめられている（Solomon, Greenberg, & Pyszczynski (1991a) にこれらの論文がレビューされている）。また、渡部（1998）では、重回帰分析の結果、死に対する「恐怖」に寄与する変数の1つに自尊心が示され、自尊心が低い者は死に対する「恐怖」が高いことについて、因果関係が認められている。

実験的研究では、自尊心や文化的世界観の正当性を強化する操作を行い、死に関係するようなビデオを見せるなどの脅威を与えた後、死の不安や不安に関係するような身体的反応を測定し、分析することで仮説を検証している。Greenberg, Solomon, Pyszczynski, Rosenblatt, Burling, Lyon, & Simon (1992) では、パーソナリティや知能のテストの結果のフィードバックによって、「テストの結果、あなたは知能が高い」というような自尊心を高めるフィードバックをされた被験者とそうでない被験者それぞれに対し、死に関係するビデオを見せ、さらに自己報告の形式で不安を測定した。その結果、自尊心を高める操作を行った条件では、不安の上昇が抑えられていた。また、ビデオの代わりに、強い電気ショックを与えた後、心理的な興奮の程度を測定したところ、自尊心を高める操作が行われた群の被験者は、自尊心が高められなかった被験者に比べ、心理的な興奮のレベルが低いという結果を得ている。また、Greenberg, Solomon, Pyszczynski, Pinel, Simon, & Jordan (1993) では、実験的に自尊心を高める操作が、根拠もなく自分は長生きするはずだというような思い込みが強くなることを抑制するという結果を得ている。

死の運命強調仮説とは、文化的世界観と自尊心が死の恐怖に対する防御としての機能を果たすなら、人に自らもいずれ死ぬ運命にあるということについて気づかせること（死の運命強調）は、これらの防御機能を強める必要性を増加させるとするものである。この仮説に従えば、死について考えさせられた人は、そうでない人に比べ、自身の文化的世界観や自尊心を強化する

ような行動、態度を示すはずである。

死の恐怖から身を守る自己防御には、近接防御と遠隔防御の2つの過程があることが、Greenberg, Arndt, Simon, Pyszczynski, & Solomon (2000) において確かめられている。死に関しての思考が求められた直後、人はまず、死についての思考そのものを抑圧（近接防御）し、その後抑圧が緩和してくると、文化的世界観や自尊心の強化を行うことによって自己防御（遠隔防御）を行う。死の運命強調仮説の検証は、この遠隔防御が行われていることを実験的に確認することである。

文化的世界観を強化する具体的な反応としては、自分の文化的世界観を支持する者へ好意的な態度や行為を示すこと、自身の信念への社会的承認を強く求めるような態度を示すこと、自分の文化的世界観に批判的な人や異なる文化的世界観を持つ人へ非好意的な態度や行為を示すことなどが考えられる。自尊心を強化する反応としては、社会的規範を遵守しようとする態度の増加、社会的に評価されるような行為の増加、逸脱することへの不安の増加、逸脱者への厳罰を求める態度の増加などが考えられる（Greenberg et al., 1997）。こうした遠隔防御の手段として、多くの先行研究において、自文化中心的、異文化拒絶的な行動や態度が、死の運命が強調されることで増加することが確かめられている。

Greenberg, Pyszczynski, Solomon, Rosenblatt, Veeder, Kirkland, & Lyon (1990b) では、死についての質問の後では、他の不快な事についての質問の後に比べ、自分の文化的世界観を支持する者については好意的な評価をし、自分の文化的世界観に批判的な者については否定的な評価を行うことが確かめられている。また、McGregor, Lieberman, Greenberg, Solomon, Arndt, Simon, & Pyszczynski (1998) では、死について質問された被験者は、他の質問をされた被験者に比べ、自分の文化的世界観を支持する者への攻撃は弱く、自分の文化的世界観に批判的な者への攻撃は強い、といった死の運命の強調の効果が確かめられている。さらに、相手への直接的な攻撃と相手を貶すことでは、先にその機会がもたらされた方略が、文化的世界

観を強化する手段として選択されることが示されている。

向井(2000)の研究1では、自分の文化的世界観を脅かすものに対する攻撃の強さを用いて、死の運命強調仮説が検証された¹⁾。被験者は、2人1組で実験に参加し、実験室に到着するとまず、それぞれ、日本文化について簡単な文章を書き、死についての質問(死の運命強調条件)もしくは虫歯(死に関係のない不快な事柄)についての質問(統制条件)のどちらかに回答した²⁾。その後、2人の被験者どちらに対しても、一方の人が書いた文章だと偽って日本文化に批判的な文章、もしくは日本文化を支持する文章を提示し、その文章を読むように指示した。人の評価に関係ない印象に関する質問の後、相手と計算の競争して勝敗によって罰(電気ショック)を与えるゲームを行うと説明し、自分が勝利した場合、相手に与える罰を設定させることで攻撃の強さを測定した。この攻撃の強さ³⁾について、2(死の運命強調条件、統制条件)×2(日本文化を批判した条件、日本文化を支持した条件)の分散分析を行った。それぞれの条件における攻撃の強さの平均値を図1に示している。

その結果、日本文化を批判される条件の被験者(M=1.22)の方が、日本文化が支持される条件の被験者(M=0.89)に比べ強い攻撃を行っていることがわかった($F(1,55)=10.46, p<.01$)。また、交互作用が有意であった($F(1,55)=4.12, p<.05$)ので、さらに詳しく検定を行ったところ、日本文化が批判される条件では、死についての質問に回答した被験者(M=1.34)が虫歯についての質問に回答した被験者(M=1.09)に比べ、強い攻撃を行っている傾向があるとわかった($F(1,55)=2.93, p<.10$)。また、死について質問された条件では、日本文化を批判した文章を読んだ被験者(M=1.34)が日本文化を支持した文章を読んだ被験者(M=0.80)に比べ、強い攻撃を行っていることがわかった($F(1,55)=14.01, p<.01$)。このことから、日本文化を批判した人に対する攻撃については、死についての思考をすることで死の運命が強調された人は、そうでない人に比べ、強い攻撃を行う傾向があると示された。これは、死の運命強調仮説

を支持する結果である。日本文化を支持する人への攻撃の強さについては、この仮説を明確に支持するような結果をえられなかったが、これは、攻撃の測定に用いた尺度の不備により床効果⁴⁾が生じたためであると考えられる。

向井(2002)では、日本文化を批判する人の評価に関して、死の運命強調仮説が検証された⁵⁾。実験の手続きは向井(2000)とほぼ同様の手続きであったが、日本文化を批判する人に対する評価への効果をより正確に検証するため、比較対象には、日本文化を批判も支持もしない文章を用い、中立な相手を設定した。さらに、攻撃を測定するのではなく、行動規範についての質問と相手(文章の書き手)の印象についての質問(18項目、7件法)への回答を求めた。行動規範についての質問とその分析に関しては後ほど触れることにする。相手の印象に関する質問項目について、因子分析(主因子法)を行い、2因子構造であると判断し、それぞれについて尺度を構成した。2つの尺度のうち、第1因子に高く負荷していた9項目からなる尺度を、相手を悪く評価する(貶す)程度を示す尺度とし、尺度得点⁶⁾を算出した。この値について、2(死の運命強調条件、統制条件)×2(日本文化を批判した条件、中立の条件)の分散分析を行った。それぞれの条件別に、相手を貶す程度についての尺度得点の平均値を図2に示した。数値が高くなるほど、相手を悪く評価していることを示している。

その結果、日本文化について批判した相手への評価(M=4.44)は中立な相手への評価(M=2.45)に比べ、相手を貶す評価であるがわかった($F(1,85)=145.95, p<.0001$)。これは、文化的世界観への脅威(日本文化の批判)についての操作の妥当性が確かめられたことを示している。また、交互作用が有意であった($F(1,85)=11.29, p<.001$)ので、さらに詳しく検定をおこなったところ、日本文化を批判する相手への評価では、死について質問された被験者(M=4.84)は虫歯について質問された被験者(M=4.02)に比べ、相手を悪く評価したことがわかった($F(1,85)=12.40, p<.001$)。また、虫歯について質問された場合、日本文化を批判した相手(M=4.02)は中立な相手(M=2.59)

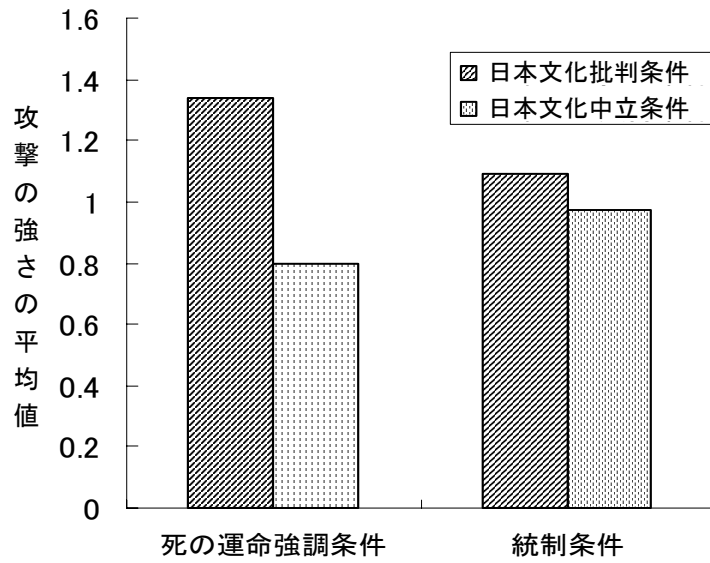


図1 攻撃の強さの条件別平均値

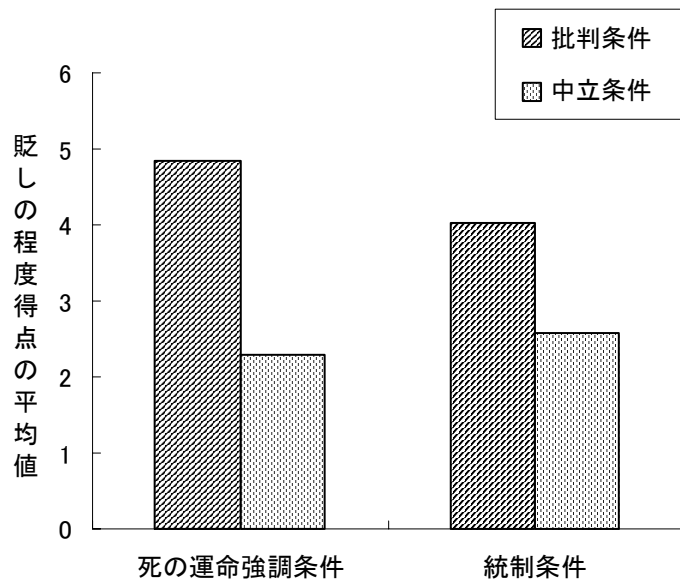


図2 貶しの程度得点の条件別平均値

に比べ、悪く評価されていることがわかった ($F(1,85) = 38.03, p < .001$)。さらに、死について質問された場合、日本文化を批判した相手 ($M=4.89$) は中立な相手 ($M=2.30$) に比べ、悪く評価されていることがわかった ($F(1,85) = 119.21, p < .001$)。よって、死について思考することで死の運命が強調された者は、そうでない者に比べ、日本文化について批判的な文章を読むことで文化的世界観が脅威にさらされた場合、脅威を与えた相手 (日本文化を批判した相手) のことを悪く評価する (貶す) ことが示された。この結果も、死の運命強調仮説を支持するものである。

こうした、文化的世界観を批判する相手への非好意的態度や行動以外でも、死の運命強調仮説は確かめられている。Greenberg, Pyszczynski, & Solomon (1990a) では、キリスト教徒の被験者は、死について考えさせられた場合には、そうでない場合に比べ、キリスト教徒である者をより好意的に評価し、ユダヤ教徒である者をより否定的に評価するという結果が得られている。Harmon-Jones, Greenberg, Solomon, & Simon (1996) は、死について考えることによって、自分の所属する社会集団を他の集団より好意的に評価する「内集団バイアス」が顕著になることを明らかにした。さらに、Greenberg et al. (1997) にあげられているように、他の先行研究では、死について考えることが、アメリカ人の大学生が「ドイツのナチスによるホロコーストはユダヤ人への神の裁きである」という意見に同意する割合を増加させるという結果が得られている。また、死について考えたのち、交通事故のビデオを見せ、運転していたアメリカ人と彼の乗っていた日本車のどちらに原因があるかを質問した場合、死について考えない場合に比べ、日本車に欠陥があったと考える傾向が高いという研究結果もある。ドイツ人を被験者にした研究においては、死を意識させられた被験者は、そうでない者に比べ、外国人への好意的な態度を示さないという報告がなされている。また、実験の合間の待合室で、先に待っているドイツ人とトルコ人、2人の中のどこかに座らなければならない場面では、待合室に行く前に死を意識させられた被験者は、そうでない

者に比べ、よりドイツ人に近く、トルコ人からは離れた位置に座るという報告もなされている。

以上のような先行研究は、文化的世界観と自尊心が、死の恐怖に対する不安緩衝機能を担っていることと同時に、死の恐怖に対する防御手段として、自文化中心的、異文化拒絶的な行動が動機づけられることを明らかにしている。実際にアメリカでは、9・11テロによって死の恐怖が高まったことが、愛国心やアフガニスタン攻撃への支持を促進する要因の1つであったと考えられる。文化的世界観の安定性が揺らぎ、自尊心が低下するような事態では、こうした傾向がより顕著になると予測される。

文化的な不安緩衝機能の低下

先に述べたように、国際化、グローバル化の中で、人は世界基準での行動を求められるようになってきており、今までの伝統的な行動規範や価値基準とは異なった規範、基準に従わなくてはならないこともしばしばである。特に都市においては、流入する異文化やグローバル化から生み出される新たな文化によって、これまで守られてきた伝統的な自文化の普遍性が著しく失われている。例えば、日本で都会的な生活といえば、和室の一切ないマンションに住み、近所づき合いは乏しく、パリやニューヨークで発表された最新の洋服を着、朝食はコーヒー、昼食は世界展開しているカフェやファーストフード店であわただしくとるなどといったことであるように、目に見える部分だけでも、多国籍、無国籍なものとなってきている。また、日常的に外国人たちと接することにより、自文化における価値基準の絶対性が失われるだけでなく、新たな基準に従うことが要求されることも多く、戸惑わずにはいられない。これまで、混沌の世界を秩序の世界へと導く、自己の文化の絶対的で強大な力が途端に脆弱なものに感じられるかもしれない。このような状況では、文化的世界観、自尊心による死の不安緩衝機能は常に低下している状態であると思われる。

また、大きな市場における自由競争では、貧

富の差は拡大し、より強大な力を持つものに富が偏在する傾向がある。そのため、経済における国際化の中で、新たに少数の勝者と多数の敗者が生まれている。敗者となることは、人に物質的な負担だけでなく、心理的な負担を与えるであろう。特に、失業しているというような状況では自尊心による不安緩衝効果の維持は困難であると考えられる。恐怖管理理論における自尊心は社会的な価値基準に照らして、価値ある自己であることが確認されてこそ維持されるものであるが、失業は社会に貢献する最も大きな手段を失うことであり、失業者は自らを社会的に価値ある人間だと評価することができず、自尊心の低下、つまりは不安緩衝機能の低下が予測される。

実際、先行研究において、失業が自尊心の低下を含むネガティブな心的作用を起こすという結果が示されている。Martella & Maass (2000) は、イタリアで被雇用者、学生、失業者に対し一般的な人生の満足度について調査したところ、失業者は、被雇用者や学生に比べ、人生の満足感、自尊心、幸福感が低いという結果を得た。Twenge & Campbell (2001) では、小学生から大学生の自尊心と社会的な統計量との関係を調べている。彼らは、Rosenberg の自尊心尺度 (Rosenberg, 1965) を用いて測定した大学生の自尊心得点が、1968 年～1994 年の間、おおむね上昇傾向であることと、Coopersmith の自尊心尺度 (Coopersmith, 1967) を用いて測定した子どもの自尊心得点が、1979 年までは下降し、それ以降は上昇するというパターンを見出した。また、後者の Coopersmith の自尊心尺度による値は、それぞれの年の離婚率や失業率といった社会的な統計量と相関があるという結果を得た。Rosenberg の自尊心尺度は、自分自身を尊敬し、価値ある人間であると考えている程度を測定するものであり、Coopersmith の自尊心尺度は自分自身を有能、有意義、成功的、価値あるものとして考える程度を測定するものである。Coopersmith の自尊心尺度は、項目に社会活動の領域を含み、社会的受容や能力を含みこんだ自尊心について測定している。この自尊心は、恐怖管理理論で定義されている自尊心に、より合致したものであるといえる。こ

のように失業の問題は個人的な問題に留まらず、社会全体に影響を及ぼすものである。自尊心の低下は、そのまま不安緩衝機能の低下につながる。特に、グローバル化における競争と勝敗重視の価値基準の中では、敗者となった場合の心理的負担は大きくなると考えられる。多数の人に心理的負担がかかる中、自尊心の不安緩衝機能の弱体化は避けがたいものであろう。

Salzman (2001) は、グローバル資本主義のシステムや文化の中では、自分が勝者だと認識し、グローバル資本主義や市場原理主義の概念で述べられる世界観を信奉しているような、比較的少数のエリートだけが文化的な不安緩衝機能を維持できると述べ、グローバル化時代における不安緩衝機能維持の難しさを示唆している。国際化、都市化されるに伴い失われる自文化の普遍性や、都市社会が常に抱える失業等の社会問題に影響される自尊心の低下による、文化的な不安緩衝機能の低下に対しわれわれはどのように対処すべきであろうか。

恐怖管理理論の観点からいえば、これまでの文化的世界観に代わって、自尊心を保つことのできるような世界観を信奉することが解決策となろう。また、現在の苦境の原因を帰属する標的を示すことのできる準概念によって、自尊心を維持できる枠組みや世界観を提供することが考えられる。中でも、現在苦境に立たされている者や立たされる可能性の高い者にとっては、苦境の原因について明確な答えと埋め合わせとなるような優越感を与え、心理的維持をもたらすようなシステムが魅力的である。そのため、異文化、異民族に苦境の原因を見出し、自文化、自民族の優位性を強めるような活動への支持が集まり易い状況が生まれるのである。

異文化受容—実験的研究

Greenberg et al. (1997) には、歴史的に、文化的世界観の脅威となるような異文化の流入や自文化への批判が行われた場合でも、調節という異文化受容的な方略が行われていることが示されている。調節とは、異文化を取り入れることや批判されている部分を改変していくこと

で脅威を低減するという反応である。

向井(2000)の研究2では、調節について死の運命強調の効果を検証⁷⁾した。先に述べた研究1と同様、被験者は2人1組で参加し、実験者の指示に従って質問に回答した。研究1と異なる点は、もう1人の実験参加者の文章という名目で、被験者に渡される日本文化についての文章は全て日本文化を批判するものだということである。さらに、相手の文章を読んだ後、攻撃の測定ではなく、日本と日本文化への批判に対し、賛成する程度(調節の程度)と相手の印象を測定した。調節の程度を測定するにあたっては、悪く評価したり、攻撃を与えたりすることができないように質問紙を作成し、賛成以外の意見は示すことができないようにした。あらかじめ被験者とは別の評定者を用い、作成した相手への同意を示す項目それぞれの調節の程度を7件法で測定し、それぞれの項目について調節の程度得点を算出した。実験では調節の程度の低い項目から高い項目まで偏りがないように14項目を採用し、当てはまるものに○をつけるよう指示した⁸⁾。印象の質問紙に関しては向井(2002)とほぼ同様のもの12項目について7件法による回答を求めた。また、先に調節の程度、その後相手の印象について答える条件と、先に印象、その後調節の程度を測定する条件の2つの条件を設定した。それぞれに調節の程度を示す得点を算出し、2(死の運命強調条件、統制条件)×2(調節—印象条件、印象—調節

条件)の分散分析を行った。図3に、それぞれの条件別に、調節の程度を示す得点の平均値を示した。値が高いほど相手に賛成する態度を示していることを表している。

その結果、先に調節を促す質問をされた被験者(M=11.57)と先に印象についての質問をされた被験者(M=8.07)では、前者の被験者の方がより相手に同意する態度を示したことがわかった($F(1,120)=6.47, p<.01$)。これは被験者が自分の行為に一貫性を求めた結果であると考えられる。また、交互作用が有意であった($F(1,120)=4.00, p<.05$)ので、さらに詳しく行ったところ、虫歯について質問された被験者において、先に調節を促す質問された被験者(M=13.68)の方が、先に印象について質問された被験者(M=7.36)よりも相手への調節の程度が高いことがわかった($F(1,120)=10.46, p<.01$)。これは、調節を促す質問紙の妥当性を示している。また、先に調節を促す質問に答えた被験者では、死についての質問に回答した者(M=9.58)の方が虫歯についての質問に回答した者(M=13.68)よりも相手に同意する程度が低いことが明らかとなった($F(1,120)=4.40, p<.05$)。よって、予測に反し、死について考えさせられた後では、たとえ賛成することが促され、相手を貶すことができないような状況でも、調節(相手への賛成)は行われにくくなることが示された。

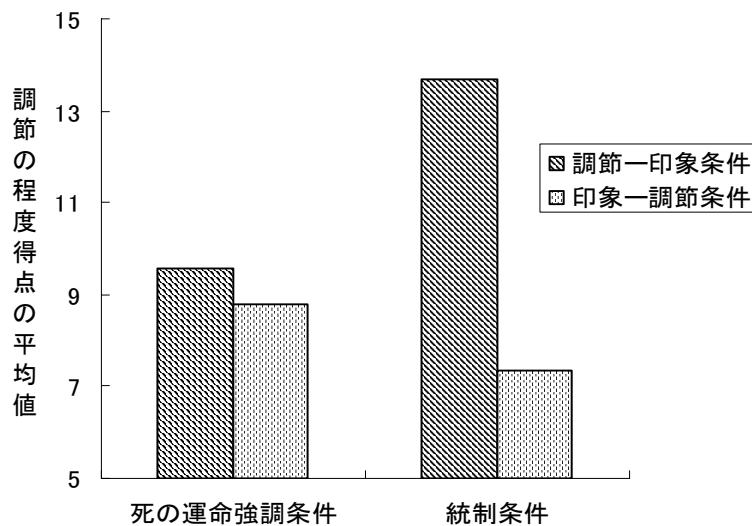


図3 調節の程度得点の条件別平均値

しかし、過激な異文化排斥運動を抑制することに対し、希望の持てる結果が示されている研究もある。Greenberg, Simon, Pyszczynski, Solomon, & Chatel (1992) では、異なる考えを持つ人に対する忍耐力に価値を置く文化では、死の運命が強調された場合、その基準に従うようにも動機づけられるため、異なる文化的世界観を主張する人に対する非好意的な反応が制限されることが確かめられている。また、死についての質問の前に、忍耐を重んじることを思い起こさせるような質問(忍耐のプライミング)を行った場合、死について考えることによる自文化を批判する人への非好意的反応の高まりを制限するという結果を得ている。このように、自尊心を支える社会的行動規範が、自分の文化的世界観へ脅威を与える人に対する過激な非好意的反応を、抑制する可能性が示唆されている。

向井(2002)では、死の運命が強調された場合、日本文化が批判された後でも、日本的と考えられるような行動規範を守るべきだとする態度が高まると予測して研究を行った。実験を行う前に、行動規範についての尺度に関し、2度の予備調査を行った。最初の予備調査では、行動規範における下位尺度の構成を行った。集団での質問紙調査の後、因子分析(主因子法)を行った結果、4因子構造であると判断され、それに基づき4つの下位尺度を構成した。さらに、2度目の予備調査では、最初の予備調査とは別の被験者に質問紙を配布し、それぞれの項目についてどれくらい日本的であるかを評定するよう求め、それぞれの尺度ごとに、その尺度の示す行動規範が日本的だと考えられる程度を算出した⁹⁾。その結果から、非日本的な行動規範に従おうという態度を示す尺度が1つ(自己主張)、日本的な行動規範に従おうという態度を示す尺度が3つ(自己抑制、思いやり、義理)得られた¹⁰⁾。実験の手続きは、先に述べたように、一緒に実験に参加している相手の書いた文章だという名目で、日本文化について批判的、もしくは中立な文章を読んだ後、相手の評価を行う前に、この行動規範に関する質問をおこなった。それぞれの尺度について、尺度得点¹¹⁾を求め、2(死の運命強調条件、統制条件)×2(日本文

化を批判した条件、中立の条件)の分散分析を行った。

その結果、非日本的な行動規範である自己主張尺度の得点において、交互作用が有意であった($F(1,85) = 4.14, p < .045$)ので、さらに詳しく検定を行ったところ、死について質問され、日本文化を批判された被験者($M=5.37$)は、虫歯について質問され、日本文化を批判された被験者($M=5.00$)よりも、自己主張すべきであると答える傾向があったと示された($F(1,85) = 3.81, p < .08$)。さらに、死について質問された被験者($M=5.89$)は、虫歯について質問された被験者($M=5.48$)よりも義理を重んじるべきだと答える傾向があるとわかった($F(1,85) = 3.10, p < .08$)。その他の結果は有意ではなかった。図4には、自己主張尺度得点について条件別平均値を示し、図5には義理尺度得点について、死の運命強調条件、統制条件における平均値を示した。いずれも、得点が高いほど、尺度の示す行動規範に従おうという態度が強いことを表している。

予測に反し、自己抑制と思いやりでは、死について考えることによる有意な効果は見られず、自己主張については、死について質問され、日本文化を批判された場合、より自己主張をすべきだと考える傾向があった。これは、先に述べた相手の評価(貶し)の結果と矛盾しない結果ではある。義理については、死について質問された場合には、日本文化を批判される、されないに関わらず、より義理を重んじるべきだと考える傾向があった。

このような研究から、文化的世界観への脅威(文化の批判、異なる文化の強要など)の程度や死の運命強調の強さなどとの関係を考慮したさらなる研究が必要であると考えられる。しかし、異なる価値観への忍耐力や多様性、相手の受容を重んじるような価値観を持った文化では、確かに、そういった価値観に対し働きかけることで、テロ攻撃や全面对決といった、過激な文化的世界観の保護活動が抑制されると期待できる。

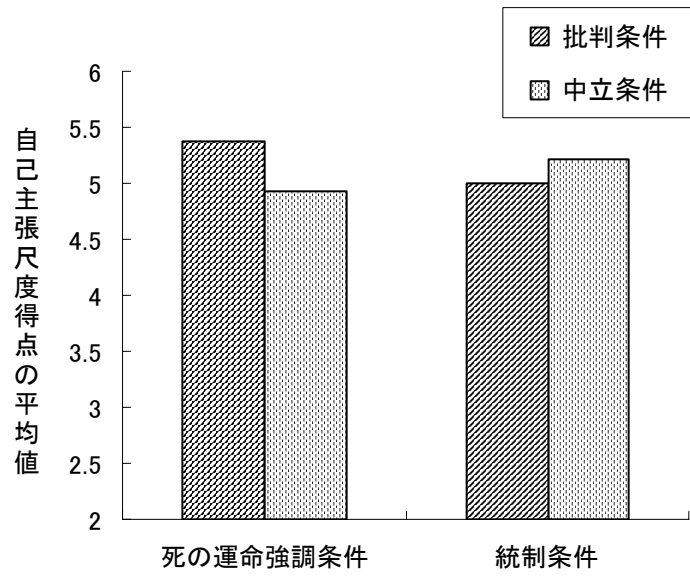


図4 自己主張尺度得点の条件別平均値

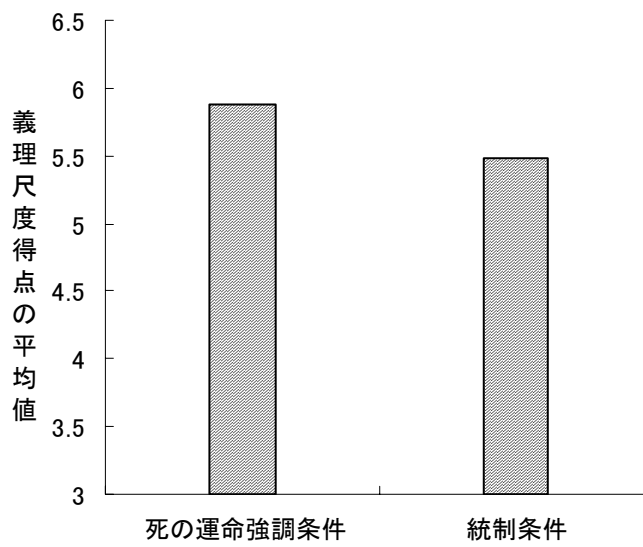


図5 義理尺度得点の条件別平均値

まとめ

国際化、グローバル化の急激な進展は、恐怖管理理論で提唱されている文化的な不安緩衝機能の低下を導き、その機能補強のための自文化中心的、異文化拒絶的な活動を促進する可能性を秘めている。自文化中心的、異文化拒絶的な活動の激化の抑制や異文化受容的な態度の促進に対しては、自文化とは異なる考えをもつ人への寛容性を重んじるような行動規範が一定の役割を果たし得ることが示されている。常に人間の多様性を尊重し、多文化共生を訴える活動を広く行うことは、このような行動規範への働きかけの1つではあるが、多文化共生はこれまでの伝統文化にとっての脅威ともなりかねない。多文化共生の活動が、過激な自文化中心的行動を抑制し、異文化受容的行動を促進する役割を果たし得る条件に関しては、死の運命強調や文化的世界観への脅威の強さ、異文化受容のプライミングや行動規範についてさらに研究を進める必要があるだろう。しかし、少なくとも、死の恐怖ができる限り顕在化しないような状況や自尊心に対する脅威が少ない状況が異文化受容にとって望ましい状況であることは間違いない。

敗者となることの不安やそのことが自尊心に与える影響について、Martella & Maass (2000) は、個人主義的規範が優勢な北イタリアの失業者と、それに比べ、より集団主義的な南イタリアの失業者について、人生の満足感や自尊心、幸福感を比較したところ、北イタリアの失業者の方がより低い値を示す結果を得ている。彼らは、集団主義的な文化では、個人主義的な文化に比べ、失業者であることがもたらす結果が深刻にならないと述べている。自分の苦しみを分かち合い、必ず助け合ってくれる家族的集団の存在は、心理的負担を軽減する重要な役割を果たしてくれるだろう。また、グローバリゼーションが引き起こす様々な問題への対処では、国際的な NGO や NPO といった非営利団体が活発な活動を行っている。経済産業省による平成 13 年度版通商白書においても、環境問題を中心に国際的な NGO の活動の広がりが取り上げられ

ている（通商政策局情報調査課，2001）。過激な行動を行う団体が皆無というわけではないが、多くの団体が環境や貧困の問題に国際的に協力し合いながら取り組み、政府の政策決定にも影響をおよぼしている。このような団体の活動は、弱者、敗者の救済に力を注ぐことで敗者の心理的負担を軽減するだけでなく、こうした団体やボランティア活動の参加者に自尊心の高揚や安定をもたらすと考えられる。過激な自文化中心的行動を抑制し、異文化への受容的反応を引き出すには、敗者の心理的負担を軽減するような概念やシステムを包含する文化的世界観の再構築が重要となるであろう。ただ、その場合の問題点として、文化的世界観の多様化に伴う新しい葛藤が初期段階で生じるであろう。そのような葛藤を軽減し、多様な文化的世界観が融和するシステムもあわせて構築する必要がある。

異文化接触が自文化の普遍性を侵害していることは事実ではあるが、異文化接触は自文化に異文化の一部を取り入れたり、自分の文化的世界観を部分的に修正したりすることで、多様な文化が入り混じる中で自文化や自尊心の安定を保証できるような下位概念を形成する機会でもある。山岸（1995）は、国際化時代にふさわしい人間像として提唱されている多くの理想的な人間モデルはどれも、自文化か他文化のどちらかを選択しているのではなく、その両方を超えた新たな世界観を形成していることを指摘している。さらにそうしたモデルから、異文化接触の体験はその人の人格全体に影響を与え、文化相対的視点を確立する機会となる可能性があると考えられている。山岸（1995）は異文化接触の結果は楽観的なものか悲観的なものか、両極のどちらかになる可能性が高いこと、その結果の予測には個人的要因だけでなく状況的要因に関して研究を進める必要性があることも示唆している。

また、山岸（1995）と渡辺（2002）は異文化への対応において求められるものの1つに、自分の行動やものの見方、考え方が自分の属する文化に規定されていることに気づくことを取り上げている。この自文化への意識を促進して

くれるのもまた異文化との接触であると考えられる。現在の都市のように恒常的に異文化接触が行われているような状況は、過激な異文化拒絶を導き易い状況でもあるが、受容的な態度の形成を促進する要素も持っているといえる。こうした状況においてこそ、死の脅威をコントロールしたり、これまでの文化的世界観に含まれる価値観や規範へ働きかけたりすることによって、過激な異文化拒絶の行動が抑制され、多文化の平和的な共存が促進されるような、異文化受容的な世界観が自文化の中に再構築されることが期待できる。ここにおける課題は、既存の文化的世界観の中の異文化受容的な側面を抽出し、それを異文化の世界観に融合させる作業であろう。

謝辞

執筆にあたっては、大阪市立大学文学研究科の金児曉嗣先生と同社会心理学教室の院生の渡部美穂子さん、河野由美さん、呉萍さん、岸川真理子さん、大阪市立大学学生の堀江尚子さん、宮崎弦太さんには多大なご協力をいただき、ここに感謝の意を表したい。

注

- 1) 実験は大学生 64 名 (女性 33 名, 男性 31 名) を対象に行った。被験者は 4 つの条件にランダムに振り分けた。手続き等の不備から 3 名は後の分析からは削除した。
- 2) 死についての質問は、「あなたが末期ガンなどの不治の病にかかったり、交通事故に遭ったりして死んでしまうことを考えるとどのような気持ちになりますか。」等 3 項目、虫歯についての質問は「あなたが虫歯になって歯医者にかかることを考えるとどのような気持ちになりますか。」等 3 項目を用い、いずれも自由記述による回答を求めた。
- 3) 電気ショックの感受性には個人差が大きいいため、あらかじめ最低どの程度の強さなら感じるのかを測定し、相手のその値を基に攻撃の設定をさせた。攻撃の強さの測度としては、設定した値から基準にした値を引いたものを用いた。
- 4) 床効果 (floor effect) とは、全体に測定値が測度の下限に近づいているために条件間の差異が検出されないこと (森・吉田, 1990) である。
- 5) 実験は大学生 96 名 (男性 55 名, 女性 41 名) を対象にし、被験者は各条件にランダムに振り分けた。
- 6) 第 1 因子に含まれた「相手の人は傲慢だ。」等 9 項目の得点を、得点が高いほど相手を貶していることを示すように再計算し、得点の合計を項目数で割り、尺度得点として被験者ごとに算出した。印象に関する質問は 1「全くそう思わない」～7「非常にそう思う」の 7 件法で回答を求めているため、この得点の中位点は 4 である。
- 7) 実験は大学生 128 名 (男性 70 名, 女性 58 名) を対象にし、被験者は各条件にランダムに振り分けた。
- 8) 評定は 120 名の大学生を対象に、「相手の意見を読んで、その意見に納得した。」等の 29 項目について、にそれぞれの項目の示す調節の程度を 1「非常に低い」～7「非常に高い」の 7 件法でおこなった。各項目の評定の平均値はそれぞれの項目の調節度を表している。実験の被験者それぞれについて、選択された項目の調節度得点の合計を、各被験者の調節の程度得点として算出した。
- 9) 1 つ目の予備調査では大学生 455 名 (男性 286 名, 女性 169 名) に対し、1「決してそうすべきでない」～8「是非そうすべきだ」の 8 件法によって回答を求め、2 つ目の予備調査では 18 歳から 32 歳までの男女 74 名 (男性 31 名, 女性 43 名) に対し、1「非常に非日本的」～7「非常に日本的」の 7 件法によって回答を求めた。
- 10) 自己主張尺度は「相手が不快に感じたとしても、相手の間違いはきちんと指摘する」等 10 項目から、自己抑制尺度は「自分の感情を押し殺しても、その場を楽しいものにするように努める」等 7 項目から、思いやり尺度は「たとえ相手が嫌いな人でも、相手を不快にする言動は慎む」等 2 項目から、義理尺度は「世話になった相手の頼みであれば、無理をしてでもかなえる努力をする」等 2 項目からなっている。
- 11) それぞれの尺度に含まれる項目について、反

転項目を修正した後、尺度に含まれる各項目の得点の合計を項目数で割り、その値を尺度得点とした。中位点は4.5点である。

引用文献

- Becker, E. (1973) *The denial of death*. New York: Free Press. (今防人訳 1989 『死の拒絶』平凡社)
- Coopersmith, S. (1967) *The antecedents of self-esteem*. San Francisco: W. H. Freeman.
- Greenberg, J., Arndt, J., Simon, L., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (2000) Proximal and distal defenses in response to reminders of one's mortality: Evidence of a temporal sequence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26 (1) , 91-99.
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (1990a) Anxiety concerning social exclusion: innate response or one consequence of the need for terror management? *Journal of Social and Clinical Psychology*, 9, 202-213.
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Rosenblatt, A., Veeder, M., Kirkland, S., & Lyon, D. (1990b) Evidence for terror management theory II: The effects of mortality salience reactions to those who threaten or bolster the cultural worldview. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 308-318.
- Greenberg, J., Simon, L., Pyszczynski, T., Solomon, S., & Chatel, D. (1992) Terror management and tolerance: Dose morality salience always intensify negative reactions to others who threaten one's worldview? *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 212-220.
- Greenberg, J., Solomon, S., & Pyszczynski, T. (1997) Terror management theory of self-esteem and cultural worldviews: Empirical assessments and conceptual refinements. In M. P. Zanna (Ed.) , *Advances in experimental social psychology*. (Vol.29, pp.61-139). San Diego, CA: Academic Press.
- Greenberg, J., Solomon, S., Pyszczynski, T., Pinel, E., Simon, L., & Jordan, K. (1993) Effects of self-esteem on vulnerability-denying defensive distortions: Further evidence of an anxiety-buffering function of self-esteem. *Journal of Experimental Social Psychology*, 29, 229-251.
- Greenberg, J., Solomon, S., Pyszczynski, T., Rosenblatt, A., Burling, J., Lyon, D., & Simon, L. (1992) Assessing the terror management analysis of self-esteem: Converging evidence of an anxiety-buffering function. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 913-922.
- Martella, D., & Maass, A. (2000) Unemployment and life satisfaction: The moderating role of time structure and collectivism. *Journal of Applied Social Psychology*, 30 (5) , 1095-1108.
- McGregor, H. A., Lieberman, J. D., Greenberg, J., Solomon, S., Arndt, J., Simon, L., & Pyszczynski, T. (1998) Terror management and aggression: Evidence that mortality salience motivates aggression against worldview-threatening others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74 (3) , 590-605.
- 森敏昭・吉田寿夫 (1990) 「実験および調査の計画法」 森敏昭・吉田寿夫編 『心理学のためのデータ解析テクニカルブック』(第6章, pp.260-270) 北大路書房
- 向井有理子 (2000) 「恐怖管理理論：死の運命強調と文化的世界観の脅威への反応」 大阪市立大学文学部卒業論文
- 向井有理子 (2002) 「死の運命強調下における文化的世界観の脅威への反応—恐怖管理理論の観点から—」 大阪市立大学文学研究科修士論文
- Rosenberg, M. (1965) *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- Salzman, M. B. (2001) Globalization, culture, and anxiety: Perspectives and predictions from terror management theory. *Journal of Social Distress and the Homeless*, 10 (4) , 337-352.

- Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (1991a) Terror management theory of self-esteem. In C. R. Snyder & D. Forsyth (Eds.) , *Handbook of social and clinical psychology: The health perspective*. (pp. 21-40) . New York: Pergamon.
- Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (1991b) A terror management theory of social behavior: The psychological function of self-esteem and cultural worldviews. In M. P. Zanna (Ed.) , *Advances in experimental social psychology*. (Vol.24, pp.91-159) . San Diego, CA: Academic Press.
- 初等中等教育局教育課程課 (1998) 『新学習指導要領』 文部科学省ホームページ：
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youryou/index.htm
- 通商政策局情報調査課 (2001) 『通商白書 (平成13年度版)』 経済産業省ホームページ：
<http://www.meti.go.jp/hakusho/>
- Twenge, J. M., & Campbell, W. K. (2001) Age and birth cohort differences in self-esteem: A cross-temporal meta-analysis. *Personality and Social Psychology Review*, 5 (4) , 321-344.
- 渡部美穂子 (1998) 「大学生とその両親の死への態度」 大阪市立大学文学研究科修士論文
- 渡辺文夫 (2002) 『異文化と関わる心理学ーグローバル化の時代を生きるために』 サイエンス社
- 山岸みどり (1995) 「異文化間能力とその育成」 渡辺文夫編著 『異文化接触の心理学』 (第11章, pp.209-223) 川島書房

Denial and Acceptance of Different Cultures: Terror Management Theory

Yuriko MUKAI

While internationalization and globalization are being promoted, ethnocentric movements are also active. Terror management theory suggests that a dual component cultural anxiety-buffer, consisting of a cultural worldview and of self-esteem, saves us from the potential fear of death. Mortality salience motivates ethnocentric and aggressive behaviors toward those others who threaten one's cultural worldview. In a metropolis, cultural uniformity and continual cross-cultural contacts brought about by economic internationalization have negative effects on the universality of our own national culture, and besides this severe economic competition makes self-esteem decline. In such a situation, ethnocentric behavior will become more extreme. To contribute to promoting the acceptance of different cultures, it is necessary to study more about our behavioral standards as prescribed by one's cultural worldview, and about cultural characteristics.

Keywords : terror management theory, globalization, cultural worldview, self-esteem, different cultures